

フリーディスカッション

司会(長田)：どうもありがとうございます。非常に幅広い話が出まして、いろいろあろうかと思います。質問も含めまして自由にご意見等を出していただいて、予定の12時半くらいまでディスカッションをしたいと思います。

田中：尾関先生が最後におっしゃったところでお伺いします。マルクスがやっているということを使って、それでいろいろなことに意味を込めたということは、今でもよくいろいろな機会でうかがっていたのですが、ちょっと不思議に思うことがあります。もしマルクスがそこで単なる交通、普通の意味での交通ということではなくて、広い意味を持たせた重要な概念としているならば、どうしてその別稿を起こして、改めて論ずるところまでいかなかったのかというのが、僕の素朴な疑問なのですが。

尾関：マルクスは『ドイツ・イデオロギー』よりもかなり以前から使っていて、例えばドイツにいた若いころからファケアというのをよく使っていて、その場合にだいたい、労働(アルバイト)とファケア、生産と交通という2つを対にしてよく使っているのです。だからその点では、注目されてしかるべきものだと僕は思うのです。だけれども、それを従来のマルクス主義はこのように解釈したのです。つまり、生産力と生産関係という図式がありますよね。マルクス主義の一つの基本的なもので、歴史の発展というのは、生産力と生産関係の矛盾によって展開していくという議論があります。交通という概念は、のちの生産関係という概念も含んだ形で確かに展開されていて、ソ連型マルクス主義では、交通というのは、生産関係の未熟な表現だと解釈

した。つまり、のちの生産関係に至る前段階の未熟な表現であるというように理解したわけです。したがって、労働と交通、生産と交通という対というのは、生産力と生産関係という概念に置き換えられるという話になったわけです。

しかしそうではないというのが、私のこれまでの持論なのです。芝田進午さんへの批判のひとつのポイントみたいなのところもあるのですが、やはりマルクス自身は、生産と交通という両面、交通の中には、「精神的交通」と「物質的交通」という言葉もあります。精神的交通というのには、当然コミュニケーションというものが入っていて、その重要性というものは彼自身、若い頃のいくつかの論文でも言っているのです。そういうことを私は、『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』という大部の本にまとめて以前に書きました。だから生産関係の未熟な形態だととられてしまったことがそのうちにある、交通概念自身の独自の意義というのでしょうか、そういうものが議論されなくなった背景にあるのではないかと思います。

田中：別の問題で、今のエコロジーと生産力の発展の関係の問題です。ずっと前に『未来への仮説』という本を書いて、一昨年、雑誌『経済』に求められて要約を載せたものがあります。そこでは、私たちの自然の認識そのものに欠落しているところがあるのではないかと、いうように指摘したのです。例えば、よくその場合の例に出すのですけれども、人間は1日に2400カロリーの熱を消費し、これは約100ワットなのです。ところが非常に活発に熱的機関として存在している太陽を考えると、60キログラムあたりに出す熱の熱機関と

しての効率は10ミリワットなのです。自然の人間の持つ、いわばアクティビティー、運動性は太陽の1万倍です。これは人間に限らず生物一般なのですけれども、自然のそれぞれの累層による運動性の高さの違いというのが今の自然観の中には入ってきていない。最近バイオがいろいろな手段として使われ、極めて量的にも速やかに、バイオという手段では増大いたしますけれども、それは今の生物というレベルにおける運動性が無機的系列における運動性の1万倍の程度に達するということの一つの表れかと思うのです。これだけを申し上げると非常に奇異な話にならなくてもいいのですが、それをもとにした循環的世界の構造が実は、循環的ではあるけれども一定の状態に生産力を止めるのではなくて、生産力を少なくともザッと勘定したところでは現在の100倍程度に拡大することができて、且つそのようにしてもエコロジカルな問題は起こらないということを論じたものなのです。その結論の是非は別にして、自然観というもの、自然の捉え方を新しい角度から見ることによって、エコロジーと生産力の発展との問題を見直すことができるのではないかという意見を持っているのです。その論文のコピーは今のところは持っていませんけれども、必要であったらお送りしたいと思います。

尾関：どうもありがとうございます。

高橋：これは質問ではないのですけれども、橋元先生の若者の携帯電話利用に関する話で、いわゆる通説で言われるような防衛的な態度というのは実はデータからは言えないというお話がありました。その話を聞いてあらためて思ったのは、そういうある種の若者像というか、「今の若者はこうなんだ」という若者イメージ、これは秋山先生の言葉ではラベリングという言い方になるのかもしれませんが、そういうものは、かなり強く若者自身にも働いているのではないかということです。例えば、個性的であることは良いこ

とだというような言われ方が、しばらく前からされ続けております。ところが、実際に誰が個性を求めてきたかという、例えば「就職のときに企業が個性的な人材を求める」とか、そういうかたちで外部から求められてきたわけで、もともと本人たちが望んで個性的になろうとしたのかどうか分からない。今でいえば、「やりたいことと合致した仕事でない」と意味がない」と学生たちは言うのですが、本当にそのように考えているのか、あるいは結果的にはそう考えさせられているのではないのでしょうか。また「自分を愛せますか？」というふうなメッセージがたえず発せられている。するとえてして、「そう言われるとどうかな」と自信がなくなって落ち込んでしまうとか、そんなふうにか何かある種の自省、セルフ・リフレクションを強いるようなメッセージがメディアによって媒介され、その作用がかなり強く働いているような気がするのです。それをどのように解毒していくか、あるいはそういうものを不用意に与えないようなかたちでコミュニケーションしていくのかというところなどは、やはり問題ではないかと思うのですが、そのあたりを秋山先生はどのようにお考えでしょうか。

秋山：この辺は人によって、地域によって全然違うので、それを一般化することがどうなのかと思います。やはりメディアの主体性と人間の主体性をどのようにうまく融合していくか。融合することによって今言われた解毒があると思うのです。では、解毒するためにどのようなコミュニケーションすればいいか。やはり人間行動の根本を考えていく必要があります。例えば個性というものは何なのか。メディアでは個性化というのは「～のような仕事をする事だ」。それがトレンドだとか規定をして世間に訴えているような気がするのです。もっと言えば「こういうふうにならねばならない」と。同じ様にこのような言葉に今の母親は悩んでいると思います。母親

を見てみてもほとんどが自分自身の子どもに対する教育もっと言えば世間が推奨する母親像に悩んでいる。本来であれば別に教育に悩む必要はないわけです。子どもが学校に行って自分自身が学校教育で何を学べばよいのかそれに気づいて勉強すればいいわけです。けれども、実際は学校の教育だけではだめだと塾や自分の教育にもっと力をいれるべきだとマスメディアが囁き立て、親が不安になって右往左往している状況があるわけです。そのため結果論と家庭教育論が先行し、どのように勉強を教えるかやどのような結果をだすかといった一昔前の教育論が未だに続いているわけです。

例えばお母さんの悩みを話すグループがあるのですが、ずっと子育てや教育に悩んでいる人たちが集まり教育をどのようにすればいいか、どうやって点数を取らせるかみたいところで悩んでおり、その問題を解決することが一つの最終点になっている。例えば集団にきちんとはまり込みきちんとサラリーマンになれるかというようなものです。学校の勉強ができないとおちこほれになり社会の中では何もできないのではないかという不安、まさしく個性があっても没個性化する従来の教育に一喜一憂しているといえます。本来であればこれだけ自由なわけですから何になってもいいわけですよ。ただその辺が許されていないところにも大きな問題があるのではないかと。最近出たハローワークの本がありますよね。その本でも思うのですが、本の中で「どういうもの（仕事）があるのでしょ」と示す。あれも個性をつくるための選択肢だと思うのですが、現代社会は自由といいながら職域や考え方に制限をつけている。自由な世の中なのでどのような仕事についてもかまわないし、本人が納得していればよいのではないのでしょうか。あまりにもすべてが便利になりすぎて、余計な時間をあまして却って忙しくしたり、何をしているのか

わからなくしているような気がします。だから自由な社会の中で生きてから死ぬまでのコミュニケーションのかたちをどのようにしていくか、これを誰がコーディネートするのか。これが重要なこれからのポイントになると思うのです。ただ今のところ、コーディネーターがどの分野でもいないことが現状だと思います。ちょっと答えになっているかどうか。

井上：田中先生が先程、尾関先生の報告に対してコメントしていらっしゃるだったので、それに関わって少し尾関先生に別のことをお聞きしたいと思います。マルクスを再考するのも結構なのですが、その再考の仕方として「マルクスは何しか問題に出来なかった」とか、「マルクスにおいて欠落していたのは何か」とか、そういう視点が必要なのではないかと思うのです。例えば権力の問題などはどうなのでしょう。4ページのところでパノプティコンのことが書いてあり、これはミッシェル・フーコーが言ったことだと思うのですね。ここでは書いてはいないけれども、明らかにそれを下敷きにした仕事です。そうしたミクロな権力の状況などについて、「マルクスはどの程度のことしか言っていなかったか」というようなことで検討したらどうかと思います。そして現在の情報社会というのは、ここでラインボールドが言っているような、そういう電子メディアの中にパノプティコンが入り込んでいるということはないのか。例えば携帯電話を使うと地図にメッシュしたセルという枠によって何処のエリアで電波が送受信されているかで、その個人の位置が特定されるような状況に既になっているわけです。便利というだけではないわけです。どのようにでも監視されてしまう。そうした状況に対応していくにあたって、マルクスの理論というのは本当にまだ有効なのだろうかということについて、お考えが何かありましたらお聞きしたいと思ったのですけれども。

尾関：率直に言って、今言われたようなこと

は、マルクス自身はあまり考えていないと思うのです。ただ例えば逆に、マルクスの場合だと「デクタツラ」というような言葉がありますよね。労働者の独裁とかというところからすれば、今いったパノプティコンですか、そういうようなところに繋がるのではないかという言い方も出来るわけです。ただ、これについてもまた別の解釈もあって、その労働者のデクタツラと言ったのはある一時期で、そのあとにはアソシエーションという言葉がそれに取って代わるというような最近の研究に基づく議論もあるというようなこともあって、いわゆる権力、とりわけミクロな権力についてもそういう議論というのはなかなか難しいところがあるのです。それでマルクスを利用して何か語れるかといったら、率直に言って、その点についてはほとんど語れないのではないかと私は思います。だから私が思うのでは、おそらくマルクスについて語るができるということになれば、やはりある種のグランドデザインみたいなところで、ポストモダン以降、グランドデザインは抑圧的なものだというので、ミクロなところを見なければ駄目だというような方向へ行っただけです。しかし、私が言っている環境とかそれから情報とかそういう問題を我々の現代社会と絡めて考えていく場合に、やはり何らかの仕方でのグランドデザインみたいなことを考えていくことが必要ではないか。その一つの素材、ある意味でいえばワンオブゼムという意味で、これまでどちらかといえばマルクスというのをマルクス主義の考えと同じレベルでマルクスの哲学思想を見ることによって、敢えて言えば「産湯とともに赤子を流してしまう」ようなそういう面もあったのではないというふうに思うのです。だからそういう点からいうとエコロジーの問題とか、今いっている交通とか、そういう概念は現代社会を考えていく上で、ある種のグランドデザインを作っていく上でのサゼッション

になるところはあるのではないかということですかね。回答になりましたか？

井上：わかりました。

尾関：だからこれで、マルクスでもって何か現代社会が直接わかるかというような話ではないと思います。マルクスの考えがそのまま適用できるような状況ではないと思います。

井上：あと、現代において人間の攻撃性が剥き出しになっている状況が気になります。権力論がらみの話にするならですが、そうした暴力を抑止する力を伝統的にそれぞれの文化は持っていたかと思うのですけれども、それが社会主義国家においてはマルクスが見通していたようなかたちでは実現しそうにないようになっているのではないか、その攻撃性や暴力の抑止に対して何かお考えのことがあったらそれも教えていただきたいと思います。

尾関：だから、私はここでは、この点でもマルクス主義のある種の階級史観至上主義みたいなものは駄目だというふうに言いました。けれども、階級の視点というのですか、この視点がやはり社会学的というか社会理論的に物事を考えていく場合に、まったく有効でないというふうには私は思わないのです。今いわれた暴力の問題というのもいわゆるガルトウングの「構造的暴力」という言葉がありますよね。その構造的暴力という概念などはミクロな仕方、あるいは日常世界でいろいろ暴力がありますよね。最近の若者・子どもや家族の関係での暴力やいじめが思い浮かびますが、そういうミクロな仕方でのいろいろな暴力があると。しかしそれは、何かよくいわれるように単なる精神病理とかあるいは教育のあり方とかそういう個々の話というよりもやはり、その根底にはある種の構造暴力みたいな、社会のあり方といいますか、構造的暴力を秘めた社会のあり方みたいなものがあって、それが噴き出しているという視点が私は必要ではないかと思うのです。だからそれからすると、私自身が批判してきたものなのです

けれども、マルクス主義の通常理解された土台—上部構造論というのは、非常に機械論的な議論なので社会理論としてあまりに一面的ではないかということで、交通とかコミュニケーションとか、そういうところに関心を持ったという経緯があるのです。しかし、社会経済的なものが例えばわれわれのメンタルな面を規定していると、個人の暴力についても単なる個人の暴力性というのではなしに、今言った社会経済的な構造としての暴力性の現われというのですか、そういう点を考えていく上では示唆するものがあるのではないかというふうには思います。おそらく、マルクスを抜きにするよりも、マルクスも考慮に入れたかたちで現代の暴力性みたいなものを考えていったほうが、よりリアルに捉えられると僕は思います。

井上：グローバル化がもたらしている暴力性というふうなことをいう場合に有効な部分も確かにあると思います。第三世界を視野に入れて考え場合などに。

尾関：そういうことですね。

田中：マルクスに関連したことなのですが、私はマルクスの資本論の「商品の分析」のところを読んで、こんな素晴らしいディアレクティークな本はないのではないかと感じて勉強したことを覚えています。ただ、こういうことを思うのです。確かにそこには人間が商品交換の受け手、送り手で、そこから経済社会の分析が非常に論理的に展開されていると思ったのですが、同時に考えてみますと人間は商品交換の単位だけではなくに情報交換の単位になっています。この場合単に情報を受け取り、送り出すというだけではなくて、受信し送信するという自身も、それぞれ情報を変換している。受信するということは、情報を変換して受け取るということ、送信するということは変換して送り出しているわけです。このように、人間が情報交換の単位になっているということから出発して、マルク

スが商品交換の単位、人を商品交換の単位としてみても経済社会を捉えて、その論理的構成を明らかにしたように、情報交換の単位として人間を捉えて、経済現象よりはより豊かに速く大きな規模で展開していくというふうに予想される社会情報現象を理論的にも構成していくというそういう仕事は横たわっているのではないかという気がするのです。僕にとってそれが社会情報学のような気がいたします。だからこれはマルクスの理論そのものをどうのこうのするというのではなくて、そこで展開される方法に対応して一つ新しいそのような社会情報現象に対する認識体系を構成していく必要があるのではないかと。それは5年、10年で出来ることではもちろんありませんけれども僕がもう一度、生を受ければやってみたいという仕事なのですが、その点どのようにお考えか、一度何かの機会に伺いたいと思っていました。

尾関：まだ先生はお元気なので、完成させていただきたいと思うのですけれども。まさにおっしゃる通りで、情報現象というのも、今言われた視点から、ある面では単位のところですが、そこから積み上げていくということは必要だと思うのです。それと同時に商品交換といってもマルクスのイメージしていた物の交換というところから、やはり情報としての商品というのですか、そういう商品情報というかそういう問題があるだろうし、それからいわゆるボードリヤールの消費社会というようなことがある。商品の売り買い自身が、そこに添付されたブランドとかそういう情報性というものが商品交換に非常に大きな影響を与え、むしろそういうイメージでもって売り買いしているのではないかという、ちょっと極端な議論もあるのですけれども、ボードリヤールのそういう視点もありますよね。だからそういう視点からすると、先生の言われた、物の交換、それから情報の交換、それからその重なり具合のあるところの交換みたい

なところで、何か一つの体系的な議論ができるような気もしますけれども、先生の今研究されているようなことについては、私自身不案内ですから、それ以上は言えないのですけれども。

田中：橋元先生にお伺いしたいのですけれども、橋元先生がいろいろな調査研究の結果、最近の携帯電話の使用というところで、「今までコミュニケーションがよく行われていたところにコミュニケーションがますます行われるようになり」、というようにおっしゃったことは、全く私もそのとおりのような気がするのです。一般に少し問題が大きくなるのですが、科学技術の一つのもたらした結果として、一般的により良いものはより良くなり、悪いものはより悪くなり、その差をどんどん広げていくような気がいたします。その非常に卑近な例をいえば、例えば私たちの周辺では物理の好きな者同士が結婚して、おそらく子どもも物理がまた好きになりはしないかという気がいたしますが、美しい女性と美しい男性が交際する機会が多くなって、生まれた赤ちゃんはよりハンサムに、あるいはより美人になるというような気もいたします。そういう意味でこの科学技術の発展というのものもたらした結果として、この世界に住んでいる人々の間の差が、違いが非常に大きくなっていく。それが人間の多様性をもたらすものなのか、あるいは格差社会を形成していくのか、非常に極端な議論としては新しい人種が生まれつつあるのではないかという議論も何かで読んだことがあるのです。この科学技術が多様な社会をもたらしてくるのか格差をもたらしてくるのか、その辺について何か感じられることがあったら伺いたいと思います。

橋元：コミュニケーションツールでいうと、例えば電話も同じで、電話が普及すると人々は直接会わないのではないかとよくいわれたのですが、アメリカの研究では電話が普及して、よく使う人ほどよく会うという研究があ

るのです。やはり先生がおっしゃったようにコミュニケーションツールに限っては、コミュニケーションする機会を増幅するメディアはフェイス・トゥー・フェイスのコミュニケーションも増幅するということがあるかと思えます。その格差の問題ですが、確かに今の新しいメディア、例えばインターネットをとっても、実際に年層とかのデジタルディバイドは、それはある程度は解消するだろうけれども、利用の様相からいうと、例えば強い情報欲求をもっている「情報ハンター」、先進的な人ほどいろいろな情報をやはり吸収して有効に活用しているのです。別の調査では、やはりそういう人は新聞も捨てない。新聞をよく読む。とにかくいろいろな情報を収集してますます情報リッチになる。一方、もともと情報欲求が低い人はインターネットを利用し始めたといっても、あまりそういう豊富な情報源にアクセスしないのです。そういう意味で情報リッチと情報プアの格差を広げる傾向があるし、コミュニケーションツールとしても同じような傾向があると思うのです。しかし、尾関先生、秋山先生両先生も関連のことをおっしゃっていたけれども、それで良いというわけではもちろんない。例えば障害者の問題とか、今までデメリットを被っていた人にそういうメディアが与えられたときに非常にメリットに転ずることができる。それはやはり新しいメディアの役割ではあると思うので、そういう部分でやはり技術者も含めて社会全体でケアしながら考えていかなければいけない。ある意味で我々は、社会的なデメリットを社会全体でフォローアップするようなそういうシステムを、文化を作るべきだと思います。

井上：最近出た岩波新書で『安心のファシズム』という本があります。斎藤貴男さんというフリージャーナリストがまとめた本です。その中で先程もちょっと言いました、携帯電話で位置情報が分かってしまうとか、Suica

というのがありますね。改札口を通るときにポンと押すとそれで通過出来てしまうという。あれにその人の行動の記録が全部残っていくわけです。そうした形で、安心をもたらすことと引き替えに、ある権力状況の中に人々が引き込まれていく。この本は、安心をもたらすという利便性に代わって何かソフトな形をとった管理が進んでいくというようなことを、いろいろな事例をあげて論じていく本なのですけれども、非常に読んでみて面白かったです。だから情報化社会について橋元先生が今おっしゃったように、これからそういうより良い社会を目指していくというようなことももちろん必要なのですけれども、もっと厄介な状況に実はなっているのではないのかというふうなことを感じてしまうのです。その辺のことについて3人の先生から少しお考えがあったら伺いたいと思います。まず権力の問題、マイクロなところにある権力とどう対立していくかというふうなことを含めてお考えのことをお話しいただけないかと思ったのですが。

司会(長田)：今のご質問に対して、3人の先生それぞれからお願いします。橋元先生からよろしいでしょうか。

橋元：監視社会ということに関して私も強く感じていて、例えばネットにつなぐとどういふサイトにアクセスしたかほとんどマイクロソフトで情報を入手していますよね。普通の庶民などはどうでもいいから相手にしないのだからけれども、特定の市民をターゲットにすればものすごい情報量を収集してその人に関する趣味なり行動なり思想なりを把握できる。これはやはり方向的にどこか狂っているのではないかと思います。『1984年』でしたか、あのオーウェルの小説を遙かに超えたところに、携帯を含めて来てしまったという感じはするのです。昨日の文化差の話に戻ると、携帯を持っていると位置情報がわかる、日本でも一部実用化されていて障害者とか一部の

高齢者に使われていますが、韓国では不思議なことにそのサービスを始めて、若い人で喜んで二人で利用しています。2人で持っている位置が分かる、お互いに知らせるというサービスがブームになりつつあるということ、ちょっと私は信じられなくて、そんなことを本当に若い人がやるのかと。とくに恋人同士が喜んでサービスに加入するのだそうで、韓国からの留学生とその監視とかの話をして、やはり感覚が違う。「先生はそういうネガティブな方向ばかり考えるから、日本では信頼性が低いのです。もっとポジティブな方面をお考えになったらどうですか」と言われる。「好きな者同士がお互いの位置がわかたら素晴らしいじゃないですか」という人もいます。だからどこまで割り切るというか、どう見るかという、やはりそこには文化というものも確かにある。方向的には僕もちょっと狂っているとは思いますが、やはり情報の収集の方向性が一方向的でおかしいからといってそこばかり取り上げるのも、ある一面、メディアの発展・進化を疎外する要因かなという気もちょっとするのです。

司会(長田)：それでは尾関先生何か。

尾関：この問題については、レジュメで私も触れていました。電子アゴラか電子パノプティコンかということで、ハード・ラインゴールドの、バーチャルコミュニティという話で今いわれたことで、日常的な我々の生活の中である種の監視システムというものがこの情報メディアというものを通じて拡大していつているのではないかというような話があると思うのです。だからこの問題は、メディアの特性ということもあるのですけれども、やはり政治権力の性格というのですか、それがやはり大きいと思うのです。やはり市民なり国民なりが、どういう政治権力というものを、日本の場合でいえば例えば選挙とか様々な運動を通じて、そういうものを形づくっていくかという、そのことがやはり大きいので

はないかというふうに思うのです。だからこの点についてはメディアという技術面自身がやはり先程の言葉でいえば、両義性があるというふうに考える方が重要で、他面では、まさにこの同じメディアを使って様々なアソシエーションというか自由結社というものがつくられ、そして公共圏というものが形成されていくと、今までのいろいろな地理的・時間的・空間的条件では制約されていた、そういうものから解放されたようなかたちでの公共圏をつくることも可能である。そういうようなところからすれば、やはり両義性でもってとらえる。究極的な話をすれば、その両義性のどちらを生かしていくかというのはやはり政治的な力関係といえますか、その権力を巡っての力関係みたいなのところが大きいのではないかというふうに思います。

司会(長田)：どうもありがとうございます。それでは秋山先生。

秋山：これはいろいろあると思うのですけれども、もともとインターネットでは一般的に考えられているのは他者に「見られてない」という安心感だと思います。ですから安心していろいろな言葉を出したりメールを出したりしている。けれども、メディア以外の今までの社会規範にずっとしがみついているのはどちらかというメディアに慣れてない世代であるのではないかと、そのメディアに慣れてない世代はやはりメディアに不安感がある。いろいろなところから「見られているのではないか」とか、権力がそこにあるという情報を得て、結局批判が出てくるのだと思うのです。逆に青少年の場合には、新しい発見をし、どちらかという柔軟性があるのではないかなと思うのです。もしリアルな社会で認められていなければインターネットで見られているということに関して快感を持つ者も出てくる。ですから両極が存在してきます。結局快感を得られれば、ネットで自由に振舞う。それに対して監視されるとしたならその

監視をすり抜けてまた違うところに入って行く。もう一方ではその監視を潜り抜けて自分を主張する。だからそれがいいとか悪いとかではなくて、そういう現実をどういうふうにして我々は捉えるのか、そこら辺はこれからの研究のポイントになるのではないかなと思います。

井上：どうもありがとうございます。

司会(長田)：今、橋元先生の方から韓国で云々という話が出たのですけれども、諸先生何かその辺に関して情報をお持ちですか。

諸：特別に(ありません)。その話は初めてなので。

司会(長田)：それでは3人の先生の間で何かご質問とかはございますでしょうか。

橋元：秋山先生にメールカウンセリング関係でお尋ねしたいのですが、この新しいメディアの普及が原因となっていわれる社会病理、個人的なレベルでも病的な現象が増えたということはあるのでしょうか？

秋山：これも2つ考えられると思うのです。橋元先生の全体像調査の部分ではなかなかそういうものが出てこないのですけれども、一部の人たち、いわゆるメディアを使っているようで使っていない、それから自分自身が社会化しているようで、していないという人たち。(このような人たちは)今までもいたわけですが、それがネットの中に入ってひどくなってきたと言えると思うのです。ただしそれは一部分の人たちだけであって、全体像ではありません。

たぶん病的な素質を持った人がインターネットやメールの中に入ってくることによって、かなりひどくなっているのは確かなのです。

橋元：すみません。ひどくなっているというのは何がですか。

秋山：いわゆる無秩序になり、現実感がなくなっているということです。カウンセリングでも現実感覚を持つことによってかなり病状

が変わるのです。昨日も話しましたように、例えば病的なものがあるとすると、現実原則がなかなか自分でわからない。本来はそれをきちんと捉えることによって社会化していくのですけれども、そこら辺のプロセスをふむことがなかなかできない。いわゆるネットの中で現実の成長をしないでずっと住み着いてしまうという状況が出ているわけです。

橋元：現実感覚ということは、つまりもしネットがなければそういう病理が起こらなかったということですか。

秋山：いえ、起こるとか、起こらないとかではなくて、もともと病理のあった人が自分の問題に直面せず、そのままネットの中に自分を根づかしてしまっているということです。対面カウンセリングなどでは対面のやりとりということがほとんどで、そうすると徐々に話をしながら人間関係を踏まえていくわけです。話が進んでいくと徐々に、いわゆる当事者が岩戸の岩を外してだんだん外に出ていく。もっと言えばいつも設定された場所、時間、2者の関係で信頼感を持ちながら、会うことによって、徐々にその人が社会化していく状況というのがあるわけなのですけれども、ネットの中ではその段階を経ないことが多いということです。

橋元：つまり現実感覚というのはネットとかそういうことではなくて対人関係で、例えばネット社会以前にもありえたことで、社会化が進まないという状況で、その自然的な治癒がメールなどを使うことによって遅れてしまうということですね。それで昨日も井上先生とかがご質問になったのですが、メールカウンセリングで治りうるというのはパラドックスのように思うのですが。

秋山：そこら辺がまた大きな問題でして、その中に何があるかといいますと、やはりカウンセラー自体のフェルトセンスといいますか、文章の中から感じ取ることの出来る部分があります。しかし、対面ではちょっと辛い

とか対面では緊張するとかとりあえず聞いてほしい場合メールカウンセリングが有効だと思います。3回という短い間ですから、全部が治るということではない。ただメールでも話ができるなら私の悩みを聞いてもらおうという人たちがカウンセリングに目を向けられる。今まで対面では来なかった人や悩みを人に話すことが出来なかった人に適合すると思います。そこに気づいてくれる人を1人でも多く発見しようというのがメールカウンセリングの目的なのです。これはちょっと難しいところなのです。確かにパラドックスになっている部分があると思うのですけれども、(メールカウンセリングは)ないよりもあった方がいいという感覚で今やっているという状況です。

高橋：今の質問に関連してなのですけれども、そういう意味ではもともとそういう傾向を持っていた人がネットの中でその傾向を強めるということですね。ですからネットの中で現実経験が積めないわけではないですよ。私の個人的な考えでは、現実経験というのは自分の思いどおりにならないことが起きるということ、例えば自分の言ったことが受け入れられずに反対されたり反論されたりということが起きる。そういう経験をすることで、人によっては自分の意見が受け入れられたり、受け入れられなかったりすることがあるのだということを学んでいく。どういう意見なら受け入れられるか、どういうことを言えば反論されるか、ということ学んでいくと思うのです。そういう経験はネットでも積めるのではないかなと思うのですが、そういうことではないのですか。

秋山：そこら辺がちょっと微妙なところでして、例えば対面カウンセリングだと何か嫌なことがあっても自由には部屋を出て行けないわけです。例えばネットですと、自分がそれに関係ないと思うとつながりが落ちるわけです。全くもう話をしない。そこで拒絶すると

いう現象がおきるわけです。例えば対面カウンセリングではその極端な拒絶が難しいのです。何になるかという沈黙になるのです。ただし沈黙というのは、いろいろこちらからしてみたら心を揺り動かせる方法でもあるのです。ただネットの中ではそういうふうな感覚とか人間関係というのは結べないですから、いったんそこで拒否感があれば全部つながりが落ちてしまうことがそこにあると思うのです。だからやはりもう一度その中で対人関係を見直していくことも必要になってくると思うのです。

高橋：逃げ場があるのがむしろかえって問題だと。

秋山：だから逆に言うと、ある人にとっては逃げ場があることがポイントになるし、そこら辺をどのようにするか。両方（の場合）あるのですけれども、確かにパラドックスになっていると言われれば、なっているのです。それをどううまくこちらが瞬間的に考えるかということがやはり技術になっていると思うのです。

高橋：逃げないでいるうちは、そのリアクションをもらって、いろいろな経験をすることはできると。

秋山：そうですね。

司会(長田)：それでは他の先生で、何かお互いの間で質問とかございますか。もしありましたらどうぞ。

祐成：社会情報学部の祐成と申します。先程の高橋さんからの質問に関連して、尾関先生にお伺いします。先生のお話の中で、資本主義と情報技術が親和的かどうかという論点について、資本主義と情報技術の結びつきにはいろいろな段階というか層があるのではないかと、思いました。マルクス解釈を一つのベースとしたイギリスの「カルチュラル・スタディーズ」から、メディア研究の流れが派生してきました。彼らが用いるキーワードの一つに、レイモンド・ウィリアムズが言いま

した「モバイル・プライベートーション」という言葉があります。日本語に直しにくい概念なのですが、ウィリアムズは1970年代にはこの言葉を使っていますから、念頭に置いていたのは「放送」と「郊外」という2つのテクノロジーの関係です。ですからこれは、狭い意味でのモバイル機器が登場して、そのプライベートな領域が増大していくというような話ではありません。放送（とりわけテレビジョン）と郊外住宅地というのは、彼の言い方だと双子のように同時代に登場し、成長して社会の中に定着してきた。いわば、テレビのあるリビングとか、ソファにもたれてそれを見ている家族というような風景です。

一方では、放送を通じて情報の流通性が上昇する。それと同時に郊外のニュータウンなどでは自動車が必需品になりますので、身体的な移動性も上昇していきます。他方で、情報も身体も非常にプライベートな性質を持つてくるようになる。つまり、モバイル・プライベートーションという言葉は、移動の活発化とか流通性の上昇と、空間のプライベート化というのが同時に進行する事態を指しているわけです。この概念がおもしろいのは、モバイルという部分、前半の部分とプライベートーションという後半の部分が実は順接とは限らないということを示唆している点だと思うのです。20世紀のコミュニケーションの特徴というのは、高いモビリティと高いプライバシーが両立したところにあるというふうに、ウィリアムズは言っている。19世紀の鉄道というのは、昨日田中先生もおっしゃっていましたが、公共的な空間としての車内とか待合室というものを生み出していきます。一方で高い移動性を保障するものでもある。ですから先程の話にもありましたけれども、19世紀の同時代には公共的な世論形成の場となったコーヒーハウスなども登場する。日本でも新聞の縦覧所ができたり、

周辺には演説を聞くというような文化も生まれてくる。つまり19世紀の新聞と鉄道といった情報技術や交通技術は、20世紀の放送とか自動車というような技術とは違った社会空間、違ったコミュニケーションを支えていたと思われるわけです。

かなり前置きが長くなったのですが、お聞きしたいのはインターネットとか携帯電話という新しい情報技術というのは、どういった空間の形成、どういった交通技術の形成と同時進行しているのか。非常に乱暴なまとめ方ですけれども、先程言いました19世紀の新聞と鉄道、20世紀の放送と自動車というような、これらは因果関係というよりは構造的な関係をもってある種のコミュニケーションを支えていると思うのです。ならば、現在の、あるいはこれから出てくるような新しい情報技術というのは、いったいどういった空間と親和性があるのか。19世紀でしたら新聞が公共的・公論的な空間をつくっている。20世紀の放送は郊外のニュータウンといったようなプライベートな空間をつくっている。次の情報技術というのはどういう空間に結びついていくのか。それは全く違ったものが出てくる、その兆候しか見えないかもしれないのですが、そういったものももしあればお聞きしたい。もしかすると、それは単に20世紀のモバイル・プライベート化の延長であって、新しいものは何も出てこないのかもしれない。そういったあたりについてお伺いしたいのです。

尾関：今後どうなるかというような話と絡んでいきますからなかなかお答えするのは難しい話ですけれども、今お話があった20世紀というのが移動性とそれから、プライベート化というのは私生活化ですか。私はエコロジーに関心をもっている立場からすると、まさに今いったキーワードというのは、近代を非常に象徴した移動性、脱空間化（脱地域化）というのですか、そして私生活化と

いうそれは近代のある一つの非常に煮詰められたシンボルといてもいいと思うのです。だからおそらくエコロジスト、非常にラディカルなエコロジストだと、まさにそれこそ否定されるべきあり方だという議論を立てると思うのです。居住すること、どこかに根づくことこそ大事なのだという話になると思うのです。そして私生活ではなしに、そこでオープンな共同性をつくり上げていくことが重要なんだという話で、昨日も言ったようにバイオリージョナリズム、生命地域主義というのは、まさにそういう発想があると思うのです。アメリカのカリフォルニアにヒッピーとか、そういう傾向の人々がある種のエコロジカルな意図でもって地域に住みついて、そこを一つのエコロジカルな地域にしていこうというそういう運動があるわけですけれども、そういう人たちから見れば、まさに乗り越えられねばならないというシンボルだというふうに話はなると思うのです。ただそこが私のスタンス自身からいえば複雑なところがあって、そういったディープエコロジー的な傾向というのですか、そういう生命中心主義とか自然中心主義というのに対してのある種の共感是非常にあるのです。しかし彼らはともすれば近代に対してある種の全面否定みたいなところがあるわけです。その点、私はどちらかといえばハーバマスに近いスタンスで、近代の積極的な価値を選択的に継承していく、それをしながら脱近代という話をやっていきたいという立場からするならば、インターネット、それから今いわれている様々なニューメディア、新しいメディアの活用ということによってその私生活性（その私生活という言葉がいいかどうかはわからないのですけれども）というのと同時に共同性みたいなものを考えていきたい。個人のもつある種のどういう言葉で言ったらいいのか、プライバシーという言葉が適切かどうかわからないのだけれども、そのもつ積極的な意味ですが、

それも私自身はやはり否定することはできない。それこそある種の毛沢東主義みたいな、あるいはそれに近いような、古くいえばプラトンの共産主義みたいなかたちでの私生活の否定、その全くなくなるような話が、ある種の粗野な共産主義という言葉でいわれますけれども、そういうものはいいとは思わない。だからある一部のラディカルなエコロジズムの中にはそういう傾向も私はあると思うのです。だからそういうのは、やはり近代が獲得した個人の尊重みたいな話ですよ。個人の尊重みたいな話と、そしてその個人がつながりをもっていくという。そのつながりというものも単なるアトミスティックな個の間のつながりでないようなものをどのように作り上げていくかというのが重要な課題と思います。方向性としてはそのように思うのですけれども、今いわれたようなかたちでメディアを2つ並べて、汽車と新聞でしたか。

祐成：19世紀でしたら鉄道、20世紀でしたら自動車。

尾関：自動車に関してもこれはいろいろまたエコロジカルな視点からすれば議論のあるところですよ。だから直ちに個人の自動車をなくして公共交通だけにして云々というような話もなかなか来るべきイメージとしてどうかというような気もする。だけど非常に単純化していえば、その自動車よりもある種の公共交通というのですか、そういうものと、やはり共同性につながるような私的空間みたいなものを両立させるようなメディアの発達の仕方を模索していくという話になるのではないかと思うのです。インターネットなどのもつ可能性ですが、よくいわれる放送と通信の融合とか、そのようなことをいろいろ考え合わせていくと、我々がどういう社会のデザインを描くかということによってやはり相当違うことがあるのではないか。その前に、今回の私の報告の基調であるエコロジカルな視点をこの情報問題にどうリンクさせていく

か、そのところが(ある)。やはりそこを抜きにしてデザインするか、(あるいは)常にエコロジカルなことを頭に置きながらデザインするかではやはり相当議論が違ってくるのではないかというそういう気がするのです。

ちょっとあまりちゃんとしたお答えにはなっていないかもしれませんが。

祐成：資料でトフラーの話が出ていて、そこでいわれているエレクトロニック住宅というのは、まさに20世紀型のプライバシー、脱空間性をもった住居のかたちのある種の発展形なのかもしれない。方向は逆転するわけですが、それでも違ってはいるわけではなくて、そういう20世紀型の方向を深めていくとこのスタイルになるのかなというふうに私は思ったのですが。

尾関：トフラーのエレクトロニック住宅というのは、要するに職場と家庭が、近代は分離していく、男は働きに出て女は家庭にいますという、そういうあり方にたいして家庭自身が職場と密着するようなあり方というものを実現されるとともに、メディアを通じて世界につながるという意味でエレクトロニック住宅といっていますけれども。

祐成：そこにはどちらかというとき積極的な意味が与えられているのですか。

尾関：トフラーは積極的な価値を与えているのですよ。だから職・住が一体化していると、そこは古き日本の場合でもそうですけれども、単なる核家族ではなしに親類縁者とかそういう者も一緒に働くというようなそういう場がつくられていくということです。それがやはり近代化というのは核家族なり、さらにその核というのが孤独化という個人単位で生活化していくというそういう方向に対してトフラー自身はもう少し共同的な職・住の場ができるのではないかという話です。

田中：今おっしゃった質問に関係して一言。僕は50年前に一応大人になりましてから、そのころと今と比べて、どこがどう違うと感じ

ているかという、一つは情報量だと思うのです。量的には非常に変わりましたが、質的に変わったものは一つもないのではないかという感じです。一番変わったものは何かという環境という問題が出たことで、それは50年前にはほとんど考えなかったことだと思うのです。僕は最近のいろいろなものを、一つひとつをそんなに眼をつむっているわけではなくて、一応は理解しているつもりですけれども、でもそれのもたらした結果はほとんど量的な変化という気がします。

高橋：今議論を伺っておりますと、ミクロな問題、これは秋山先生のお話で、マクロな問題、これは橋元先生のお話なのですが、そのいずれにしても突き当たってしまうのは本人のもっている傾向ですとか、あるいは文化という話が出てきましたけれども、そういった問題に突き当たってしまうわけです。それをどう議論するか、どうアプローチするかということが大変難しいところです。ちょっと視点を改めて尾関先生に質問ですけれども、実はこの大学がある江別市では今年10月からゴミ有料化が始まりまして、ゴミ袋が指定のもので処理費用が上乗せされたものが販売され、それしか使えない。(分別の種類は)燃えるゴミと燃えないゴミになります。これはたいへん卑近な例に落とすのですが、そのようなものが決まってくる際に市民の公共圏での合意形成があったかという、ちょっとあったとはいいがたい状況の中で、市のほうが財政上の問題を含めて判断して施行されたということだと思うのです。逆に言えば、そのようなプロセスを踏んでいける地域をどう作っていくかというふうな問題が、おそらく尾関先生の問題意識につながるのではないかなと思うのです。そのようなところで、先生ご自身今まで、例えば指導されている学生さんの研究で、そういう何か地域の公共圏とその環境対策みたいなものが結びついているような事例を何かご存知でしょうか。

それに付け足しでもう一点述べますと、システムと生活世界というハーバーマスのお話がありました。しかし、地域での環境問題への取り組みといったことは、生活世界的な対話の論理だけでは当然解決できなくて、それこそいわゆる経営合理性ですとか、経済合理性といった論理も無視できないわけです。むしろ、そういうシステムも生活世界も双方が協力しないと解決に結びつかない問題だと思います。

ふりかえってみて、もともとフランクフルト学派の初期の世代は、ハーバーマスがシステム合理性を掲げて登場する前は、道具的合理性の議論をしたわけですが、それももとをたどれば人間が生きていくために環境の中で問題を解決し、生き延びていくための論理から発展していったものです。そういう意味では、我々が直面する問題にどう対処し、それを技術的な手段を講じながら、かつ合意形成しながら解決していくかというふうな、そういう意味ではシステムも生活世界も関係なく、両方あわせて一つの地域づくりという視点になるのではないのでしょうか。

尾関：私のところの学生・院生の研究例で具体的には2つぐらいあります。両方とも似たようなものです。一つは調布の深大寺というところがありまして、深大寺には神代公園と、それとお寺があって自然豊かな文化的な場所です。(問題となったのは)やはり道路の拡幅ですよね。それで東京の場合は都心に向かっていく道路はたくさんあるのですけれども、上から下に走る南北の道路はあまりないということで、都のほうとしては、公園のすぐ前に、かなり拡幅するような話で、それについての議論が持ち上がりました。深大寺は住宅地であると同時に古い寺を中心とした、ゆかりのある土地だというようなことで、反対運動があがった。道路について協議というのか、いろいろ都側とかあるいは地元の地主、それから住民で協議委員会みたいなものを作って

議論する。その議論の経過みたいな話と、ボルノーの居住の思想というものを絡めた形で論文を書いた者もおります。協議の結果、居住空間を考慮した道路空間の設計がある程度できたようです。

もう一つは、これは報道でご存知かと思いますが、東京を大きくグルッと回り、高尾山の下を通す、圏央道という話があり、それも住民の反対運動と都側の協議会みたいなのがあります。これも最近の裁判についてご存知かもしれませんが、都のやり方に対しての裁判所の強い批判があると同時に実質的にはやむを得ないという話になるわけですが、その場合、あそこで興味深かったのは、あらかじめ、今の法体制だと具体的な被害が出るという住民にしか訴えができないのですが、プランができる段階で住民同士の話し合いを持つべきではないかということを経験者が提起したのです。そういうことを公共圏と絡めて少し研究をしていくという学生もいますね。だから今言われた公共圏とエコロジーの問題というのは、私の研究室においてはかなり関心のあるテーマだと思います。

それから、ハーバマスに触れられて言われたことですが、そのシステムと生活世界との関係をどう考えるかという点については、これは色々な議論があるかと思うのです。ハーバマスは、目的合理性というかシステム合理性というものが、人類生存にとって不可欠な労働から来ているのだという仕方、労働概念を本質的に規定するのですが、私は労働概念自身を、もう少し膨らみを持った、それこそコミュニケーションを含んだ仕方での労働概念を考えてみたいと思います。その場合に例えば機械化されない農業労働というイメージや、介護などの社会福祉的な労働など、そういうものを含みこんだ形でのコミュニケーション的な側面をもった労働のイメージを労働という概念の中の中心に据えるべきだとい

うことです。ハーバマスの場合、私の目から見れば工業労働、近代主義的な労働概念みたいなものを労働ということの典型にして、目的合理性と関係づける視点にしているわけです。そここのところがどうか、と私は思います。だから、私は労働とコミュニケーションの内的連関ということを昔から言ってきた、ハーバマスは基本的に評価するのですが、やはりハーバマスの場合は労働とコミュニケーションを二元的に対置しているのではないかと、それによって、労働概念もコミュニケーション概念もやはり一面化される傾向があるのではないかと。そうじゃなしに、両者は区別はされるのですが、統合みたいな形で考えておく必要がある。だから労働の中にコミュニケーションの側面を本質的に考え、コミュニケーションの中にもやはり労働との不可分の関わりを考えていく必要があると思います。そういうことを主張してきたわけですが、だからその意味からいえば、システムということの捉え方自身についても、いろいろ疑問があるのです。ちょっと答えになってないかもしれませんが。

高橋：最後に言われたコミュニケーションと労働の相互浸透的な関係があるという点で全く同感です。むしろそういうふうな捉えた方が、現実的にもまた問題を考える上でも、仮に区別するとしても双方の連関がうまくいくのではないかと思います。

尾関：だから、おっしゃるとおりで、ハーバマスの場合、システムの方を労働の論理で、生活世界の方をコミュニケーションの論理というアプローチなのですが、これはやはり単純化し過ぎていると思うのですが。

司会(長田)：2日間に渡って先生方ありがとうございました。それでは、予定の時間ですので、これでフリーディスカッションを終わらせていただきまして、終了の挨拶を研究委員長の石井先生からお願いします。